

日英オンライン言語交流の継続とその効果

—持続可能な英語学習のモチベーションに関する一考察—

森 幸穂, バンクス祥恵

1. はじめに

近年、様々なアプリやツールの開発が進み、オンライン上で国際交流を行うことがより身近になった。Tendami や Hello Talk などのアプリを使えば、容易に目標言語を話すランゲージパートナーが世界中で見つけられ、会話練習を行うことが可能である。また、様々な教育機関で、COIL (Collaborative Online International Learning) も実施されている。そして、多くの先行研究が、オンラインのツールを用いて国際交流することは、コミュニケーション・スキルを高め (Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023), 異文化理解を促進し (Anderson & Or, 2023; Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023), 学生の自信につながり (Carlisle & Sáenz, 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023), 21 世紀の社会が求めるグローバル人材育成への効果的なアプローチである (Liu, 2023; Quintana-Ordorika, et. al., 2023) と指摘している。しかし、長期間オンライン交流を続ける効果に関する研究は、未だ少ない。本稿では、アメリカの大学で日本語を学ぶ大学生と約 2 年間にわたり、日英オンライン交流を行った青山学院大学理工学部の学生 1 名の英語学習に対するモチベーションの変化を分析する。また、2 年間の継続的なオンライン交流を経て、学生が何を得て、将来の目標やその後の英語学習にどのような影響をもたらしたのかについて質的考察を行う。

2. 研究背景

2.1. 近年のオンライン国際交流の動向及び実践報告

Collaborative Online International Learning (以下 COIL) とは、2006 年にニューヨーク州立大学 (SUNNY) によって開発された、学生や教師が文化を超えて共に学び、議論し、協働するアプローチである。O'Dowd (2018) によると、COIL は、Virtual Exchange (以下 VE) に該当し、オンライン上の異文化交流やコラボレーションに焦点を当てた様々なオンライン教育・学習アプローチを網羅する包括的な用語であると説明している。COIL VE は、バーチャルな交流という点で、その方法論が特殊であり、このモデルの教育効果を研究することは、学生の学習や異文化間知識・能力の育成に与える影響を理解する上で重要な役割を果たすと言われている (Merlino, 2023)。

COIL VE は、2023 年だけでも多くの研究があり、コミュニケーション・スキルを高め (Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023)、異文化理解を促進し (Anderson & Or, 2023; Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023)、学生の自信につながり (Carlisle & Sáenz, 2023; Liu, 2023; Gutiérrez, 2023)、21 世紀のグローバル人材育成の効果的なアプローチである (Quintana-Ordorika, et. al., 2023; Liu, 2023) と指摘されている。

Anzai, et. al. (2023) は、日本とオーストラリアの大学で、日本語と英語でプレゼンテーションとディスカッションをした結果、それぞれの目標言語でコミュニケーションをとり、お互いの文化を学ぶのに有効であったとしている。Carlisle and Sáenz (2023) は、シンガポールとメキシコの大学の英語授業にて、おとぎ話を作るプロジェクトをしたところ、異文化に触れ、英語を使ってストーリーを書く練習をし、自信をつけることができたと述べている。

さらに、外国語教育だけでなく、様々な分野で COIL VE が実施され、その有効性が論じられている。Anderson and Or (2023) は、米国とブラジルの成人学習者をつないだ COIL VR が、異文化理解に有効であったとしている。Gutiérrez (2023) は、スペインのリハビリテーション・エネルギー効率学科の大学院生とペルーの建築学科の大学生と COIL VE を実施したところ、学生

の異文化理解を高めることが明らかとなった。さらに、COIL VE は、学生の自信とコミュニケーション・スキルを高め、新しい学習環境で国際交流する機会を提供したと述べている。Quintana-Ordorika, et. al. (2023) は、バスク地方でトリリンガルの学位を取得した小学校教員養成課程の学生のモチベーションについて量的研究をした。その結果、モチベーションが高ければ高いほど、COIL VE に参加することに肯定的であると結論づけている。そして、COIL VE は、グローバルな学習への取り組み、21 世紀社会が求める人材育成への効果的な教育的アプローチだと示唆している。

それでは、COIL VE を長期的に実施した場合も、学習者の外国語学習へのモチベーションが維持され、コミュニケーション・スキルを高め、異文化理解を促進し、自信に繋がり、21 世紀社会が求めるグローバル人材育成への足掛かりとなるのであろうか。本稿では、長期にわたりオンラン交流を行った日本人の大学生について、COIL VE から何を不得、将来の目標や英語学習にどのような影響を与えたかを分析する。

2.2. 生涯学習におけるモチベーションの重要性

米国で長年日本語教育に従事してきた當作 (2014) は、外国語学習は単なる「外国語の習得」ではなく、21 世紀型社会で活躍できる人材を育成するための「人間形成」であるべきだと論じている。外国語学習を通して異なる背景や価値観を持つ他者と協働し、尊重し合い、共に生きる力を身につけることが現在のグローバル社会では求められており、外国語の習得はその一過程に過ぎない。また、そのような人間形成は、短期間で完結するものではなく、新しい他者との関わりを経て、生涯続くものだ述べている (當作 2014)。

外国語学習を生涯学習と捉えた場合、学習を持続可能にするためには、継続できる環境の確保といった物理的要因に加えて、学習者自身がモチベーションを維持することが必要である。Dornyei (1994) は、モチベーションには、内発的動機づけ (intrinsic motivation) と外発的動機づけ (extrinsic motivation) があるとしている。内発的動機づけ (intrinsic motivation) は、言語に対する

純粋な興味や知的好奇心によって外国語を学びたいと思うことで、外国語学習によって得られる見返りを期待しない。一方で、外発的動機づけ (extrinsic motivation) は、外国語学習をすることで何かを得たいという欲求で、外国語能力を活かして良い仕事を得たい、志望する大学に入学したいという動機がこれに当たる。外発的動機づけは、教師の指導や教育課程での必要性によって誘発されることが多く、学習者が学習を過度にコントロールされていると感じた場合、学習意欲の低下をもたらす場合がある。しかし、Ryann and Deci (2000) の自己決定理論 (self-determination theory) が示すように、学習者自身が、外発的動機を内発的動機に連動、または転換させることによって、内発的動機を高めることが可能になる (小笠原, 2013)。そのため、内発的動機づけ (intrinsic motivation) と外発的動機づけ (extrinsic motivation) 両方を連続させることが、学習成果に繋がるのである (Ryann & Deci, 2000)。

一方で、Dornyei (1994) らの研究によれば、外国語学習のモチベーションは統合的欲求 (integrative motivation)、自信 (self confidence)、学習環境 (learning situation) によって維持されると述べられている。統合的欲求 (integrative motivation) とは、学習者自身が異文化や異なる言語を話す人々に興味を抱き、その言語を用いる人々と交流し、彼らの地域社会に参加したいという欲求のことを指す。自信 (self confidence) とは、言語習得のみならず、何かしらのタスクに取り組み、達成することができるという自己認識のことで、外国語学習を継続する上では、目標が達成できたという自信を持つことが重要だと言える。そして、到達目標や個人の学び方、興味に合った学習教材、適切な指導及びカリキュラムデザインといった学習環境 (learning situation) も学習意欲を維持するために必要である。

外国語学習を継続する上では、自分の成長を振り返り、軌跡を内省することも重要である (Ishihara & Cohen, 2010)。Ishihara and Cohen (2010) は、外国語学習者が異文化間の言語と文化を理解するために内省がどのように役立つかを議論し、学習者がコミュニケーションの誤解を理解し、改善するために内省が必要であると結論付けている。また、言語学習ストラテジー (Language

Learning Strategies) 研究においても、自分の学習を評価し、振り返るメタ認知ストラテジー (metacognitive strategy) は、言語学習において学習効果を高め、語学スキルの向上を促進できると報告されている (Cohen & Upton, 2006; Phakiti, 2003; Tin, 2009; Zhang & Wu, 2009)。

大学の授業以外の時間を使ってオンライン交流に長期的に取り組む場合、このような学習者のモチベーションはどのように変化し、生涯学習にどのような影響を与えるのだろうか。本稿では、アメリカ人大学生とのオンライン交流に継続的に取り組んだ日本人の大学生の軌跡に焦点を当て、モチベーションを維持する上で、この活動がどのように有効に働いたかを質的に分析する。

3. 研究方法

アメリカの大学で日本語を学ぶ大学生と 2 年間にわたりオンライン交流を行った日本人の大学生 1 名に約 40 分間の半構造化インタビューを行った。

このオンライン交流は日本語で会話がしたいアメリカの大学生 10 名と、英語で会話がしたい日本人の大学生 1 名のために筆者が計画したもので、2022 年度の後期に 8 週間、2023 年度の後期に 9 週間行われた。

オンライン交流は、前半 20 分を英語で、後半 20 分を日本語で参加者が自由に会話するという内容で、アメリカの学生 1 名対日本人学生 1 名で会話ができるよう筆者が参加者の希望に合わせてスケジュールを調整した。日本人学生は 1 名だったが、アメリカの学生は参加希望者が 10 名いたため、日本人学生は毎回この活動に参加し、アメリカの学生は順番を決めてその都度異なる参加者が日本人学生と話すという形式を取った。また、春学期は日米の大学のスケジュールが大きく異なるため実施が難しく、秋学期のみの実施となった。今回のオンライン交流への参加は全員自主的なもので、参加による成績への影響や課題の提出などはなかった。

インタビューでは主に次の 4 つの質問をした。1) オンライン交流をやりたかったと思った経緯、2) どのぐらいの頻度で参加し、どのぐらい話したか、3) オンライン交流を継続する中で、学んだことや考えたこと、4) オンライン交

流が自分の将来の目標にどのような影響を与えたか。日本人学生は、以上の質問に自由に回答し、その発言に対して筆者が更に質問をした。インタビューは録音され、文字化された。本稿では、インタビューで回答した学生を学生 A とし、頻出したキーワードを中心に、学生 A のモチベーションにどのような変化があったか、このオンライン交流が何をもたらしたのかを分析した。

4. 結果・考察

録音されたインタビューを文字化し、頻出したキーワードを中心にカテゴリー化したところ、学生 A がオンライン交流に参加し、継続した過程において、1) 高い到達目標と憧れの存在（～になりたい）、2) 既存概念の崩壊と多様性の発見（～だと思っていたけど違った）、3) 自己内省（自分も～かもしれない）、4) 他者と出会うことそのものを楽しむ姿勢（価値観が広がった）が随時見られた。これらの概念と英語学習のモチベーションには相関関係があり、オンライン交流を続けるうちにこれらの概念を意識する機会が増え、それと同時にさらに英語学習をしたいという気持ちが増長したようである。次に、これらの4つの概念についてインタビューで得られたデータを元に考察する。

4.1. 高い到達目標と憧れの存在

学生 A には、「パイロットになりたい」という夢があり、大学入学当初からパイロットになるには英語が必要だと考えていた。実際にパイロットが業務に必要な英語は特殊で限られていること、国内線のパイロットになれば日本語で仕事ができることは知っていたが、国際線も飛べるパイロットになりたいという気持ちから、「英検1級を取得する」という具体的な目標を定め、英語の学習に励んでいた。しかし、身近に英語を話す相手がいなかったため、筆者に英語の授業後に相談し、オンライン交流をすることになった。この段階から既に、学生 A が自分の夢のためには何をすべきかを考え、具体的な目標を定めて英語学習に取り組んでいたことがわかった。

また、パイロットになることとは別に「英語を話せる人ってカッコいいなあ」

という漠然とした憧れがあり、パイロットになるという夢があったからこそ英語学習に励んだものの、その目標とは別に、憧れのスキルとして「英語が話せること」が常に頭の中にあったことが推察できた。

これらの英語学習に対する動機付けを過去の文献を元に分析すると、「パイロットになりたい」という外発的要因が大きく影響を与えていた一方で、英語そのものに対する好意的なイメージや興味があり、内発的要因も持ち合わせていたことがわかる (Dornyei, 1994; Ryann & Deci, 2000)。そしてこれらの動機付けは、単に一人で英検1級の学習に励むのではなく、オンライン交流に参加し、多様な価値観や考え方に会い、増長されたことがインタビューの中で明らかになった。

4.2. 既存概念の崩壊と多様性の発見

学生Aによると、オンライン交流に参加するまでは、アメリカやある特定の人々に対する漠然としたイメージやステレオタイプがあった。例えば、日本で「大学生」というと、大体20代前半の男女を想像するが、今回オンライン交流におけるアメリカの大学からの参加者の中には退職してからもう一度日本語を学びに大学に戻った学生もいた。その参加者とオンラインで会った時には、「すごく驚いた」が、後ほど、それは自分が日本にいるからそのような年齢に対する固定観念を抱いていただけで、アメリカには「本当にいろんな人がいる」ことに気がついたという。

さらに、アメリカ人に対するイメージも、オンライン交流を経て変わって行ったようだ。それについて、学生Aはインタビューの中で下記のように述べている。

みんなと接してみると、やっぱりアメリカ人ってオープンなイメージがあって、フレンドリーかと思ったけど、そうじゃない人もいりし、色々な人がいるなって。そういうのは日本にいるだけじゃわからなかったから、価値観が広がったかな。

そして、このようにアメリカの多様性や日本との差異を実感すると同時に、日本との共通点にも気づくことができたようだ。例えば、アメリカの大学は勉強が大変で、学生がよく勉強するという固定観念があったものの、実際に話してみると、パーティーに行ったり、それほど勉強していない学生もいたりして、日本の大学生とあまり変わらないと感じたようだ。同様に、「朝ごはんは何を食べるか」という話では、日本とアメリカの食生活の違いを強く認識した一方、「週末は何をするか」という話では、スーパーでアルバイトをするなど、日本の大学生と同じ様子も見られ、アメリカの多様性だけではなく、日本との類似性にも気づくことができたという。

これらの既存概念からの脱却や新たな発見は、異なる参加者と継続的にオンライン交流を続けたからこそ得られた学びであり、数回、または少数の参加者とのオンライン交流だけではわからなかったことかもしれない。また、近年多くのアプリやツールがあり、容易にランゲージパートナーを見つけて英語を話すことが可能である。しかし、アプリを使って自分でパートナーを探す場合には、予めプロフィールを見て話しやすそうな人を選んだり、趣味嗜好が似ている人と定期的に交流するため、今回の活動のように固定概念を覆すほどの驚きが得られないかもしれない。

そして、日本にいただけではわからなかったことが、オンライン交流を通してわかったからこそ、「もっと話してみたい」と思うようになり、それがオンライン交流を二学期間（2022年度と2023年度後期）に渡り、2年間継続する動機付けとなったようだ。

これらの動機を分析すると、オンライン交流で様々な人々に出会ったことで、Dornyei (1994) の統合的欲求が高まり、英語学習全体に対するモチベーションが高まったことが推察できる。そして、このようなモチベーションの維持を実現にするためには、日米の大学の教師が連携し協働して学習環境を確保することが必要だったことがわかる (Dornyei, 1994)。次に、様々な人と日英両言語で話すことで、英語学習の動機にどのような変化が得られたかを分析する。

4.3. 自己内省

今回の日英オンライン交流では、日米双方の参加者に目標言語で話す機会が与えられるように、英語だけで 20 分、日本語だけで 20 分話すことが事前に定めてあった。日本語が母語の学生 A にとって、英語だけでなく日本語でも話すことにはどんなメリットがあったのだろうか。

それについて学生 A は、「日本語で話している時は、自分の言っていることがそんなに伝わってない時もあった」と指摘し、それは、「英語で話していれば自分にも起こり得ること」だと自分で考察していた。相手の言っていることが伝わらない際、明らかに困惑した表情を見せたり、わからないから他の言い方で言ってほしいと頼んだりする場合もあれば、内容を誤解していること自体に気づかずに、わかったつもりで話を進めたり、的の外れた返答をしてしまう場合もあるだろう。後者の場合は、誤解や間違いを指摘してもらうまで「伝わっていないこと」に気がつかないため、相互理解ができないまま会話を終わらせてしまうこともある。

オンライン交流で目標言語である日本語を話す相手を目の当たりにしたからこそ、このような可能性に気づき、英語を話す自分を振り返ることができたとと言える。そして、その振り返りと気づきを通して「もっと英語を頑張りたい」という気持ちにつながったようだ。インタビュー中に述べられたように、学生 A は、英検 1 級を目指しており、英検準 1 級まで取得していた。そのため、既に会話に十分な英語力を持ち合わせている可能性が高い。その一方で、日本語を話す他者を観察し、外国語で話す際の相互理解の困難さを再認識したことが英語学習への新たな動機付けとなったと考えられる。そして、Ishihara and Cohen (2010) が指摘しているように、学生 A がコミュニケーションの誤解を理解し、改善するために内省していたと考えられ、メタ認知ストラテジーを使っていたように見える。

4.4. 他者と出会うことそのものを楽しむ姿勢

インタビューの中で、学生 A はオンライン交流での出会いだけでなく、日

常生活の中で出会った人々にも言及した。様々な価値観や生活習慣を持つ人とオンラインで出会い、楽しいと感じたことがきっかけとなり、日常生活でも人との出会いを意識するようになったようだ。インタビューの中では、「やっぱり海外とかが行って、一人で過ごすのもいいけど、いろんな人とコミュニケーション取るのもいいなって」思うようになったと述べていた。そして、パイロット養成を専門とする教育機関に入学し直したことで、様々な背景を持つ人々と出会う機会があり、その人達の話聞くのが面白いと感じるようになったそうだ。例えば、実際にパイロットになったら、行く先々でテニス観戦を楽しんだり、その土地の食事や飲み物を楽しむこともできると聞き、自分が思い描いていた生活とは違うものの、そういうことも試してみたいと述べていた。

このように、オンライン交流で様々な相手とコミュニケーションを取ったからこそ、その楽しさがわかるようになり、楽しいと気づいたからこそ、オンライン交流とは別の日常生活でも人との出会いを大切にしていくという構図は、英語力のみならず総合的なコミュニケーション・スキルの獲得にもつながると考えられる。そして、他者との関わりや協働、共存を重んじる人間へと成長することは、外国語を習得することが外国語学習の最終目標なのではないと主張する當作（2014）の論と合致している。

「日常では全く出会う可能性がない人と出会い、外国語で話す」という継続的活動がもたらしたものは、英語学習に対する意欲の向上だけでなく、人々が持つ異なる文化、価値観、考え方を尊重し、違いや類似性を楽しみたいという意欲の向上でもあったと言えるだろう。そして、それは生涯学習とも言える21世紀型の外国語学習および人間形成の中で重要なモチベーションだと考えられる。

5. まとめ

本稿は、2年間の継続的なオンライン交流を経て、学生が何を得て、将来の目標やその後の英語学習にどのような影響を与えたのかについて、半構造化インタビューを行い、分析し、考察した。

その結果、長期間のオンライン交流 (COIL VE) は、Ryann and Deci (2000) が論じたように外発的動機づけ「パイロットになりたい」「英検 1 級と取得したい」だけでなく内発的動機づけ「もっと英語を話せるようになりたい」を増長させることがわかった。また、長期間のオンライン交流は、学生の必要な学習環境 (learning situation) を提供することができ、それが Dorney (1994) が指摘する統合的欲求「相手をもっと知りたい話したい」に繋がられたようである。

さらに、このオンライン交流を通して、この学生が、日常生活の中でも、様々な価値観や生活習慣を持つ人との出会いを意識するようになったことから、多くの先行研究にあるように、COIL VE が、コミュニケーション・スキルを高め (Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023), 異文化理解を促進したようである (Anderson & Or, 2023; Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023)

COIL VR は、教師の準備に時間がかかり、使用ツールや時差の問題 (Kučerová, 2023), 学生の不安感を解消する必要性 (Anzai, et. al., 2023; Carlisle & Sáenz, 2023) など、多くのハードルがある。しかし、教師が協働して COIL VE を実施することは、21 世紀のグローバル人材育成の一助となるのではないだろうか。

参考文献

- Anderson, A., & Or, J. (2023). Fostering intercultural effectiveness and cultural humility in adult learners through collaborative online international learning. *Adult Learning*. <https://doi.org/10.1177/10451595231182447>.
- Anzai, Y., Ichihara, M., Kitazawa, T., & Akahori, K. (2023). A Cross-cultural comparison of perceptions of language exchange programs in collaborative online international learning. In T. Bastiaens (Ed.), *Proceedings of EdMedia + Innovate Learning*, 525-530.
- Carlisle, D., & Sáenz, J. (2023). COIL, COILer, COILing: English language learners participating in collaborative online international learning, *The Southeast Asian Conference on Education 2023*.
- Cohen, A. D., & Upton, T. A. (2006). *Strategies in Learning and Using a Second Language*. Pearson Education.
- Dorney, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, 78(3), 273-284.

- Gutiérrez, G. S., Coello, T. C. E., Cuenca, R. L. A., Carpintero, V. C., & Bravo, A. R. (2023). Incorporating collaborative online international learning (COIL) into common practices for architects and building engineers. *International Journal of Learning, Teaching and Educational Research*, 22(2), 20-36.
- Ishihara, N., & Cohen, A. D. (2010). *Teaching and Learning Pragmatics: Where Language and Culture Meet*. Routledge.
- Kučerová, K. (2023). Benefits and challenges of conducting a collaborative online international learning class (COIL). *International Journal on Studies in Education*, 5(2), 193-212. <https://doi.org/10.46328/ijonse.110>.
- Liu, Y. (2023). Overview of the impact of collaborative online international learning on learners. *SHS Web of Conferences* 157. <https://doi.org/10.1051/shsconf/202315704011>.
- Merlino, A. (2023). Intercultural knowledge and competence: Assessing U.S. undergraduates in COIL virtual exchange. (Doctoral dissertation, Notre Dame of Maryland University). ProQuest Dissertations Publishing.
- O'Dowd, R. (2018). From telecollaboration to virtual exchange: State-of-the-art and the role of UNICollaboration in moving forward. *Journal of Virtual Exchange*, 1, 1–23. <https://doi.org/10.14705/rpnet.2018.jve.1>.
- 小笠原麻衣子 (2013) 「内発的動機づけを高める英語指導に関する一提案 ―グローバル社会で通用する技術者の育成を目指して―」『四国英語学会紀要』33, 63-72.
- Phakiti, A. (2003). A closer look at the relationship of cognitive and metacognitive strategy use to EFL reading achievement test performance. *Language Testing*, 20(1), 26-56.
- Quintana-Ordorika, A., Camino-Esturo, E., Portillo-Berasaluze, J., & Garay-Ruiz, U. (2023). Integrating COIL in teacher training: An estimation of learners' motivational attitudes. *Front. Educ.* 8, 1141620.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Tin, T. B. (2009). Language learning strategies and English proficiency: A study of burmese undergraduate students. *The English Teacher*, 38, 62-82.
- 當作靖彦 (2014) 『NIPPON 3.0 の処方箋』講談社.
- Zhang, L. J., & Wu, A. (2009). Chinese learners' use of learning strategies in the task-based language learning context. *The Modern Language Journal*, 93(1), 56-78.

Effectiveness of Continuing Online Language Exchange in Japanese and English

—Analysis on Motivation for Sustainable English Learning—

MORI Sachiho, BANKS Sachie

The development of various applications and tools made online international exchange more accessible. Collaborative Online International Learning (COIL) has also been implemented in institutions around the world. Many previous studies indicated that engaging in international exchanges through online tools enhances communication skills (Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023), promotes cross-cultural awareness (Anderson & Or, 2023; Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023), raises students' confidence (Carlisle & Sáenz, 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023), and offers an effective approach for global citizen in 21st-century society (Liu, 2023; Quintana-Ordorika, et. al., 2023). However, research on the effects of long-term online exchanges remains limited.

This study analyzes the changes in motivation for English language learning in a student who engaged in Japanese-English online exchanges with American university students over two years. Qualitative analysis were conducted regarding what students gained from long-term online exchange and how it influenced his future goals and subsequent English language learning.

The results showed that long-term online exchange increased not only the extrinsic motivation but also the intrinsic motivation (Ryann & Deci, 2000). In addition, the long-term online exchange was able to provide students with the necessary learning situation, which led to an integrative motivation (Dornyei, 1994). Through this online exchange, this student became more aware of meeting people with different values and lifestyles in his daily life, and as shown in many previous studies, COIL VE enhanced communication skills (Anzai, et.

al., 2023; Gutiérrez, 2023; Liu, 2023) and promoted cross-cultural awareness (Anderson & Or, 2023; Anzai, et. al., 2023; Gutiérrez, 2023). Teachers collaborate to implement online exchange may contribute to the development of global citizenship for the 21st century.